https://www.daitoken.com/ ISSN:0286-6854

大学の図書館

第42巻第10号（No.599）
2023 10

目　次

第54回全国大会おつかれさまでした～ …… 有馬　良一 …127
特集：全国大会フラッシュ
移動しながら参加した全国大会 …… 河野由香里 …128
大学図書館問題研究会の歴史を見る：2011年～2023年 …… 加藤　晃一 …130
「大学図書館研究会 第54回全国大会」参加報告 …… 南雲　知也 …132
久しぶりの対面全国大会 …… 中川恵理子 …134
転職後の全国大会：3日目のプログラムの感想を中心に …… 今野　創祐 …135
変わるもの、変わらないもの …… 前田　郁子 …137
第54回全国大会に参加して …… 花﨑佳代子 …138
大学図書館研究会第54回全国大会に参加して …… 諏訪　有香 …140
リアルに集えるありがたみを感じた全国大会 …… 柿原　友紀 …141
一参加者の見た全国大会 …… 岩井　雅史 …143
学術コミュニケーションの理解とデータクレンジングの方法 …… 松野　高徳 …144
コロナ禍を越えて続いていく大会：大会実行委員の視点から …… 赤澤　久弥 …146

第54回全国大会おつかれさまでした～

有馬　良一

先日、大学図書館研究会の全国大会が久しぶりのオンサイトで行われ、一部はWeb配信とのハイブリッド開催となりました。全国委員や大阪地域グループの方をはじめとした実行委員の皆さん、お疲れさまでした。そして、全国大会に参加してくださった皆さん、ありがとうございました。

さて、この大会の最終日に開催されたシンポジウムでは、今話題の生成AIについての話を聞く機会を得ました。このシンポジウムを通じて、今後我々は生成AIのある世界を前提に生きていく必要があるということ、AIの進化が私たちの分野にも新たな展望をもたらしていることを実感しました。実はこの文章も、エッセンスを有馬が入力→ChatGPTが文章を出力→有馬が文章を整頓、という方法で作成しました。AIが言葉を紡ぐことが、我々のコミュニケーションや知識共有にどのように影響を与えるかを考えるうえでも、おもしろい経験だなと思っています。

今号は、例年同様全国大会参加者からの感想を掲載しています。同じ出来事でも、人によって感じ方や受け取り方はさまざまです。それぞれの視点から得られる異なる感想によって、ひとりでは思いつかなかった新たなアイデアや視点が得られるかもしれません。もちろん最終的には自身のフィルターを通して理解することにはなるわけですが、それでも多様な意見を知ることは重要だと思いますし、そのための大図研や会報なのかなとも思っています。

最後に上記の文章に絡めて、ChatGPTから一言いただきました。「未来への展望と新たなアイデアを大切にし、多様な視点からの洞察を求める姿勢は、素晴らしいものです。共に成長し、新たな可能性を追求しましょう。」

（ありま・りょういち／神戸大学附属図書館）

特集：全国大会フラッシュ

大学図書館研究会第54回全国大会が、2023年9月23日（土・祝）～25日（月）の3日間、大阪大学豊中キャンパスを会場として、対面開催されました（プログラムの一部はハイブリッド開催）。

今号では、「大会フラッシュ」として、大会参加者、大会実行委員の方々に、大会の印象を執筆していただきました。大会の内容を振り返ることのできる多彩な内容です。

なお、第54回全国大会の記録は、2023年12月号（大会記録号）に掲載される予定です。

（会報編集委員会）

移動しながら参加した全国大会

河野由香里

全国大会が数年ぶりに現地開催されると聞いた当初「今年は現地参加しよう」と楽しみにしていました。これは大阪が魅力的な土地であることはもちろんのこと、自身がこれまで参加した札幌（2015）、京都（2017）、九州（2018）の全国大会経験から、現地参加の「魔力」と呼べるような、特有のエネルギーを感じてきたからです。コロナ禍で現地開催が中止された以降も、すっかり憑りつかれたように「現地であの熱気を再び体験したい」と感じていました。

魔力と書きましたが、その源は参加する人間一人ひとりであり、会場の熱気と場の力で高まり、場に同席することで周りに波及する…簡単に言うとやる気のスイッチのようなものだとお考え下さい。例えば私のような人見知りの方であればお心当たりがあるかもしれませんが、意気込んで申し込んだものの、会場の雰囲気にのまれ「うまく話せるだろうか」等と怖気付いたことはないでしょうか。中には、不安を感じるあまり「そもそもなんで現地参加しようと思ったんだっけ」と、かなり前の状態まで遡り、申し込んだ時点の自分に対し後悔し始める方もいらっしゃるかもしれません（ここまで極端なのは私だけかもしれませんが…）。

しかしながら全国大会のあの場では毎度不思議な魔力が働き、上のような心配は杞憂に、不安は霧散していきました。全国の濃い面々に触発されたのか、現地の熱い空気感が手伝ったのか？いつの間にか自ずから交流の輪に近づき加わっていくようになるのです。

ここまで現地参加の魅力を綴っておいて恐縮ですが、この文章の書き手は今回現地参加を諦めた者の中の一人です。ぎりぎりまで粘ったもののスケジュール調整が難しく、今回はオンライン参加することにしました。現地参加に未練がなかったとは言えませんが、以前であれば参加自体を断念せざるを得なかった状況であり、オンラインがあったおかげで今年も参加できるようになりました。関係者のみなさま、今大会もオンライン開催を実施してくださり本当にありがとうございました。

今回自分にとっては数回目の全国大会オンライン参加でしたが、昨年までとの違いは「ハイブリッド開催」であったことです。今大会、オンライン参加者は参加費3千円を支払うこ

とで、一日目の研究発表と記念講演を聞くことができました。欲を言えば三日目のシンポジウムも聞きたかったですが、現地で開催される方のご苦労を思えば、そこまで望むのは欲深いかもしれません。

ハイブリッド開催ということで、映像や音声がどのようになるのか気になっていましたが、司会・発表者の主要な発言はほぼ問題なく聞き取れたと思います。発言切替のタイミング等で会場のざわざわした音が聞こえてくることがあり、その音を聞いて「全国大会だなぁ」としみじみ感じたことを覚えています。これは会場音声のせいで発言が聞きにくかった等と言いたいわけではなく、会場の映像がない状況で「場に同席している感覚」がどうしても欠如しがちなオンライン参加者にとって、現地参加者が交流し盛り上がっている様子が音から垣間見え、会場の様子がわかるのもよいものだなと感じた瞬間でありました。

さてここで、タイトルを回収しておきたいと思います。本来でしたら静穏な環境で腰を落ち着け参加したかったのですが、今回は別件と重なってしまったため、なんと移動しながら視聴することになりました。発表者におかれましては、せっかくのご発表をこのような形で視聴することになり申し訳ありません。PCとタブレットを持ち歩き、移動しながらの参加となりましたので、背景を出さず、途中出入りしていたのにはこのような事情がありました。

研究発表は実務の面からもとても興味深く、「京都大学新OPACにおける電子リソースへの誘導機能実装報告」「ディプロマ・ポリシーと大学図書館」いずれも、他機関での実践につなげることができる有益な情報をご提供いただきました。特に京都大学の取り組みは、日本全国で電子リソースの発見性を高めることが期待されるもので、裾野の広さを感じるものでした。記念講演では大阪大学全学教育推進機構の村上先生から「大学における教育DXと大学図書館の役割」というテーマでご講演いただきました。大阪大学での詳細な事例をご紹介いただき、自分の所属大学でのオンライン授業等を振り返り、今後の支援を考えるきっかけとなりました。

今回本記事を書くにあたり、自身が前回現地参加した際に書いたフラッシュ記事（2018年10月号掲載）を読み返したところ、9月8日の大会開始、その2日前に「平成30年北海道胆振東部地震」があり、北海道全域で停電（ブラックアウト）したこと。自宅の水道・電力復旧まで40時間かかったことが書かれていました。停電の中執念で飛行機を再手配し、大会一日目の午後に会場入りしましたが、この時現地でお会いした全国の方から温かい歓迎、またお見舞いの言葉をいただいたことは今でも忘れられません。

今回久しぶりに現地参加された方は、会場で「お久しぶり」「お元気でしたか」等のやり取りをされたのでないでしょうか。コロナ禍以降、対面で交流する機会の貴重さを知る数年でしたが、また現地でみなさまとお会いできますように、全国大会だけでなく、各地域グループ主催イベント等も含めて機会を狙っていきたいと思います。

最後になりますが、開催にご尽力いただいたみなさま、貴重な機会をありがとうございました。

（こうの・ゆかり／小樽商科大学）

大学図書館問題研究会の歴史を見る：2011年～2023年

加藤　晃一

はじめに

大学図書館問題研究会（現・大学図書館研究会、以下、大図研）創立50周年にあたり、大学図書館史分科会ではその歴史をテーマとした企画を第48回全国大会（2017（平成29）年）から続けている。今回は前回同様、小山荘太郎氏（横浜国立大学）が2011（平成23）年から2023（令和5）年を概観して発表し、それを受けて筆者が各大会や当時の大学図書館の状況について適宜コメントした。本稿は大図研50年の歴史の一部であるが分科会での発表を元にした全国大会（以下、大会）を中心とする記録である。

1. 2011（平成23）年

第42回大会は東京都北区で開催され参加者は134名（担当：関東支部合同）、この大会で亀田俊一委員長が勇退、第6代委員長として呑海沙織氏が就任した。3月の東日本大震災直後であり、最終日はオープン・シンポジウム「震災そのとき、そのあと―震災と図書館について考える」をテーマとしてUSTREAMによる動画配信も行った。この年の4月に大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）が設立されている。

2. 2012（平成24）年

第43回大会は京都市で開催され参加者は159名（担当：京都支部）、呑海委員長体制での最初の全国大会、全体会では5月に東京と大阪で開催された「大図研の今後を探る集い」を受け、会員減や支部体制の問題など大図研の今後について議論が交わされた。この大会では協賛企業へのフォローとして企業展示とランチタイムでの企業レビューを行った。また7月に大図研Webがリニューアルされた（現行のもの）。

3. 2013（平成25）年

第44回大会はつくば市で開催され参加者は102名、支部のない地域での開催、また常任委員会と実行委員会との共同運営方式（以下、共同運営）での初開催となり、今年の第54回までこの運営方式が続いている。この大会で「大学図書館問題研究会 ミッション・ステートメント」（https://www.daitoken.com/aboutus/mission_statement.html）が承認されている。また10月に大図研のFacebookの運用が始まった。7月に大図研結成メンバーのお一人である大日方祥子さんが急逝され、翌年2月に「大日方祥子さんを偲ぶ会」が行われた。

4. 2014（平成26）年

第45回大会は山形市で開催され参加者は75名（担当：共同運営）、2年連続で支部のない地域での開催となった。支部はなかったものの山形大学の職員の方々のご尽力を得ての開催だった。会期中に山形駅や山形空港に掲げられた大会歓迎のウェルカムボードに驚き、また懇親会での学生サークルによる花笠音頭で盛り上がった大会であった。

5. 2015（平成27）年

第46回大会は札幌市で開催され参加者は94名（担当:共同運営）、北海道支部のサポート。電子ジャーナルのパッケージ契約を見直す大学が増え始めたことからオープン・シンポジウムは電子ドキュメントデリバリーサービスとペイ・パー・ビューをテーマとして今後の展望を考える場となった。また会報『大学の図書館』が前誌から数えて7月号で通号500号となり特集が組まれた。

6. 2016（平成28）年

第47回大会は広島市で開催され参加者は89名（担当:共同運営）、広島支部のサポート。都道府県を基礎とした支部体制から地域グループ制への移行となったが、神奈川支部と石川支部が移行せずに解散、11地域グループの新体制となった。また研究グループ制も

開始し初の萌芽的研究グループとして学術基盤整備研究グループが誕生した（2019年に長期的研究グループに移行）。この年の大図研オープンカレッジは初めて東京を離れ京都で開催された。この年の7月にオープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）が設立されている。

7．2017（平成29）年

第48回大会は京都市で開催され参加者は133名（担当：共同運営）、京都地域グループのサポート。シンポジウムは「オープンサイエンス時代の大学図書館の役割」をテーマに、先進的な取り組みを行っている京都大学の事例を学び、今後の展望について考える契機とした。会場確保の都合もあるが今大会は9月に開催され、以降8月中の開催に拘らなくなっている。群馬地域グループが解散し10地域グループとなった。

8．2018（平成30）年

第49回大会は福岡市で開催され参加者は80名（担当：共同運営）、九州地域グループのサポート。西南学院大学の新図書館が記憶に残る大会、2日目のランチタイムには学修・就活サポートについての自主企画が開催された。会報5月号では「特集　大図研創立50周年に向けて：歴史を振り返る（その1）」が組まれ、50周年へのカウントダウンが始まっている。6月に大阪府北部地震が発生し府内の大学図書館が被災しており、翌年2月の会報で国立民族学博物館と大阪大学の図書館の被害が報告されている。

9．2019（平成31／令和元）年

第50回大会は神戸市で開催され参加者は113名（担当：共同運営）、兵庫地域グループのサポート。関西から関東への常任委員会移行が決定した第21回と同会場だった。今大会でも協賛企業への配慮を厚くし、2日目の昼食会場で協賛企業PRを設けた。関西常任を支えた第3代委員長の酒井忠志さんが8月に逝去されている。

10．2020（令和2）年

第51回大会は大図研50周年記念大会であったが新型コロナ禍による感染症対策もありオンライン形式で2日間の日程での開催となり参加者は131名（担当：共同運営）、以降第53回までオンライン開催である（会員の参加費は無料）。会員総会で「大学図書館研究会」への名称変更案が承認された。この年は会員間の交流を深めるためオンライン交流会をほぼ毎月実施している。

11．2021（令和3）年

第52回大会はオンラインで開催され参加者は136名（担当：共同運営）、1月に「大学図書館研究会」に名称変更し最初の全国大会。昼休憩に企業プレゼンテーションを組み込み、前年には実施しなかった交流会を設け、自主企画では大図研恒例の「地酒の会」も実施した。また参加申し込みにオンラインチケットサービスを導入し実行委員会の負担軽減を図った。1月号（40巻1号）から会報が電子化され、1年間のエンバーゴ後、オープンアクセスとなった。また前年に引き続きオンライン交流会が実施された。埼玉地域グループが解散、9地域グループとなった。大図研の結成メンバーのお一人で初代委員長だった松田上雄さんが4月に逝去されている。

12．2022（令和4）年

第53回大会はオンラインで開催され参加者は137名（担当：共同運営）、ほぼ前回を踏襲した内容で、企業プレゼンテーションや「地酒の会」があった。日本私立大学連盟が2021年8月に公表した提言「ポストコロナ時代の大学のあり方」で大学図書館の現状を否定する評価が出たことを受けて、シンポジウムは「「司書」養成の現在地」をテーマとして大学図書館の職員養成に関する議論を深めた。

13．2023（令和5）年

第54回大会は豊中市で開催（担当：共同運営）、大阪地域グループを中心に関西の地

域グループのサポート。初日の研究発表と記念講演はZoomで配信し対面とオンラインとのハイブリッド開催を試行した。分科会は例年より少なく6分科会、飲食抜きの交流会により参加者間の交流会を図った。会員総会は別日程でオンラインにより開催されている。

おわりに

この期間は呑海委員長（後に会長）が就任し大図研50周年を契機として、呑海氏の強力なリーダーシップにより運営改革を進めたことが特筆されよう。新型コロナ禍という逆境の中でも全国大会を中止させることなく実施したことは大きな成果の一つである。また大図研の旧来のイメージを払拭し会員拡大に寄与するとして名称変更を提案し実行した。この間の「呑海改革」が今後どのように実を結ぶのかが楽しみでもある。今回の大学図書館史分科会で大図研の50年を振り返る作業は一区切りついたが、他の話題もあり十分に俯瞰が出来なかった。今後はその歴史全体を改めて俯瞰し深掘り出来ればと考えている。

久々のリアルな全国大会は旧知の仲間と新たな仲間に会えて充実した3日間であった。末尾で恐縮だが開催に尽力された常任委員会・大会実行委員会の方々にお礼申し上げる。

（かとう・こういち／千葉大学附属図書館）

「大学図書館研究会 第54回全国大会」参加報告

南雲　知也

外部の視点も欲しいからと原稿を頼まれたのだが、図書館システムベンダー勤務の身の上でさてどんな感想を書こうかと悩ましい。「ディプロマ・ポリシー」という単語も初めて聞くという状態で気の利いたコメントを書ける気がしない。幸いなことに今大会は私の普段の仕事に関連するテーマも取り扱われていたので、ここではその辺りにだけ焦点を当てて感想を述べたいと思う。

研究発表「京都大学新OPACにおける電子リソースへの誘導機能実装報告」

自分が利用者の立場で考えるなら、電子リソースもOPACで検索できて閲覧できるなら確かに便利だなと思う。色んなサイトやサービスを使い分けるのは正直面倒だし難しい。発表を真似してOPACにNDLデジコレのデータを全部図書館システムに取り込む事を考えてみる。まず書誌データを一括で取り込む様な機能はたいていの図書館システムに何らかあるだろう。データ更新を日々自動でするとなるとバッチ処理や機能改修が必要かもしれない。懸念するのはNDLデジコレのデータの件数が300万件以上あるという点だ。たぶん各図書館システムは想定する蔵書数に合わせて検索結果の適合率と再現率のバランスだったり、サーバーのマシンスペックなりを考えていると思われる。300万件のデータを想定しているのは規模の多い大学に限られるのではないだろうか？そう考えると個別のOPACに取り込むのではなく、書誌提供元のサイトを横断検索して一緒に結果を表示するといった機能をOPACに実装する方が現実的なのかななどと考える。

第6分科会学術情報基盤「データクレンジン

グのはじめ方」

図書館システムのサポートをやっていると検索結果や集計件数が合わないといった問い合わせを受ける事があるのだが、紐解いてみると原因はデータの不備だったという事は多々ある。何十年も蓄積した図書館システムのデータ品質が一定ではないのは承知しているが、おかしなデータを発見するという作業はなかなか面倒だと感じていた。そんな折に今回使い方を教えて頂いたOpenRefineはすぐに活用できるという印象を抱いた。便利な機能はいくつもあるのだが、そのなかでもファセットとクラスタリングの機能が興味深かった。類似しているデータをひとまとめにして表記ゆれを示唆してくれる。試しにERDB-JPのデータを使ってpublisher_nameの項目でファセット→クラスタと辿ると171件の表記ゆれが見つかる。例えば「土木学会・衛生工学委員会」と「土木学会衛生工学委員会」と「土木学会衛生工学委員会 」とか。もうExcelとにらめっこする日々とおさらばだ。

シンポジウム大学図書館は生成系AI の夢を見るか？

カーリル吉本さんの発表にあったChatGPTのAPIを活用した蔵書検索サポーターの仕組みが面白い。対話形式でのChatGPTの活用ではなくAPIを利用することで新しいサービスを展開している。ChatGPTの応答は実在しない本を紹介するといった様な事があるが、それをOPACの検索結果と照合するといった形で埋め合わせる発想に活用の幅を感じる。また仕組みがスライド一枚分のわずかなコードで表現されている事に驚いた。自然文で検索できるとか、関連の単語を教えてくれるといった機能は今までもあったけれど、それを専門的な知識や技術もなしにわずかな表現で実装できそうな雰囲気がある。ChatGPTへの指示は日本語でいいし、コードの書き方はなんならChatGPTが教えてくれる。アイデアを形にするハードルがものすごく下がったと感じた。色々試してみたくなる。

最後に、大学図書館のまわりにはこんな話題があるのかと色々知らない事を知る良い機会になった。新しい学びを得ることができる機会を提供してくださった運営に関わる皆様には大変感謝申し上げたい。

（なぐも・ともや/株式会社ブレインテック）

久しぶりの対面全国大会

中川恵理子

第54回大学図書館研究会全国大会の参加報告です。今回の全国大会は、1日目と2日目午前中のみの参加で、全体の半分ほどしか参加していないのですが、終了後1ヶ月も経過していないフレッシュな感想をお届けしたいと思います。

4年ぶりの対面全国大会参加だったため、何を準備して参加するのか、思い出すまでに少し時間がかかりました。周辺の地図を印刷までして、準備万端だったのですが、道に迷いました。大阪大学近辺は大会ホームページに掲載されていた会場マップのおかげで大丈夫でしたが、JR大阪駅周辺は難易度が高かったです。最近このような機会がなかったので、すっかり忘れていましたが、地図を見るのが苦手だったと思い出しました。これもまた対面全国大会ならではの気付き？でしょうか。

大阪大学に行く途中の石橋商店街では、日清チキンラーメンのヒヨコちゃんのマンホールを発見したり、お弁当屋や和菓子屋などの学生街らしい色々なお店を眺めながら歩きました。初めて行く土地で、知らないものを見るというのは、対面の大会でしか出来ない体験です。歩いているだけで楽しく、わくわくしました。対面の全国大会に参加する実感が湧いてきました。

午前中に実施された全国大会の打ち合わせでは、全国委員や大会運営員のみなさんと久しぶりに対面でお会いしました。オンラインの会議では、顔を合わせていたので、実際にお会いするのが初めての方に対しても、久しぶり！という気持ちになりました。打ち合せ後は、近くのカレー屋さんにお昼ごはんを食べに行きました。お会計で一万円渡した人が、関西弁で「ハイ！一億円ねー！」と言われていて、知らない土地にいるのだと改めて実感しました。ウワサでしか聞いたことなかったのですが、本当にそういう感じのことを言うのですね。関西で商売されている方は、みなさんあのようなテンションなのでしょうか？今度、関西方面の方、どなたか教えてください。安くてお腹いっぱいになるカレーのお店でした。

午後は研究発表と記念講演に参加しました。記念講演の村上先生による「大学における教育DXと大学図書館の役割」では、大学教育におけるオンライン化の流れや大阪大学の事例などを、コロナ期での自分の体験を重ねながら拝聴しました。「本当にコロナ期は、大変だったよな」と過去形で言えるようになってよかったです。講演は、ニューノーマル時代の大学図書館の有り方について、考えさせられる内容でした。アフターコロナとなった今、変化させてはいけないもの、変化するべきもの取捨選択しながら、これからどのようなサービスを展開していけばいいのか、これから考えていきたいです。

大会2日目、午前中の第2分科会キャリア形成「大学図書館員と研究活動-社会人大学院生の学びとキャリア」を担当しました。登壇者の佐藤さん、井上さん、久保山さんからは、貴重なお話を聞くことができました。ありがとうございます。翌日に朝から学務があったことから、午後の分科会には参加せず、金沢への帰路につきました。

本当は、もっと時間と体力さえ許せば、プログラムに参加したかったし、色んな場所に寄りたかったです。3日目のシンポジウム「大学図書館は生成系 AI の夢を見るか？」は、話題の生成系 AI と図書館という話題で、興味がありました。せっかく大阪大学に来たので、図書館や豊中キャンパス内にある総合博物館を見たいと思っていました。あとは、大阪らしいものを食べてみたかったです。

本学は既に新学期が始まっていたので、慌ただしい参加になってしまいましたが、久しぶりの対面での全国大会は楽しかったです。

オンラインで会っていた方に、対面で会えると嬉しいものです。全国大会運営員のみなさん、大阪地域グループのみなさん、大変お世話になりました。また、来年の全国大会でみなさんにお会いしたいです。

（なかがわ・えりこ／金沢学院大学）

転職後の全国大会：3日目のプログラムの感想を中心に

今野　創祐

他の皆様のタイトルとの差異化を図るため、「転職後の全国大会」というタイトルをつけてみたわけですが、正直なところ、大学図書館員から大学教員に転職したところで、大図研全国大会の楽しみ方に違いが生じたわけではなく、なんとなく詐欺のようなタイトルとなってしまいましたが、「違いが生じない」という知見を共有するのもまた意義があるかなと思いまして（無いか・・・）、このタイトルのまま行かせていきたいと思います（私事ですが、この4/1に、京都大学の図書系職員から東京学芸大学の特任講師に転職しました）。

おそらく他の皆様も同様のことを書かれているかと思いますが、昨年度のオンライン開催の全国大会と違って、対面型になったことで、旧知の皆様と空き時間や大会終了後に様々な形で交流でき、近況を知ることができたのは、とても有意義なことでした。これまでお名前は伺っていたものの、ご挨拶したいと思いつつもその機会がなかった方々何名かと初めてお話できたことは、貴重な経験だったと思います。

私は今回の研究大会につきましては、3日間、最初から最後まで参加しましたけれども、以下、ご参加された方が少なかった自主企画などが開催された、3日目のプログラムについて書かせていただきます。

午前のシンポジウム（テーマ「大学図書館は生成系AIの夢を見るか？」）では、山中司氏（立命館大学生命科学部教授）、吉本龍司氏（株式会社カーリル代表取締役）によるご講演と、それを受けての質疑応答がありました。山中氏はご専門の英語教育の観点からChatGPTについて語られました。もはやChatGPTの能力はネイティブの英語力に匹

敵するものとなっていること、今後、純粋に英語の能力を測るという意味でテストはいつまでも必要だが、それを入試などにおける選抜の道具とはしない時代になるのではないかといった、これまで私があまり聞いたことのない斬新なご意見の連続で、非常に大きな知的刺激を受けました。一方、吉本氏は、今後の図書館とChatGPTの関係などについてお話をされました。「この本のタイトルの覚え間違いの候補を10挙げてください」といったChatGPTの使い方など、こちらも面白いお話は多々伺いましたが、一番印象的だったのは、吉本さん（私より1歳年上）は小学生の時点で、「もうこれからの時代、漢字は書ける必要などない（読める必要はあるが）」と割り切って漢字を書けるように覚えるのはやめ、テストではすべてひらがなで回答し（ヘタに漢字を書くと誤字で減点されるので）、レポートはすべてプリンタで打ち出したものを提出で、それでは受け取ってもらえない場合は出さないことにしたとのお話。もっとも、吉本さん曰く、「漢字を手で書くのをやめてしまえと言いたいわけではない。できない人を包摂する社会の有り様が良いのではないか」とのこと。私は子供の頃、母から「字が綺麗な方が、頭の良い人に見えるから」みたいな感じで書道を習わされていたものの、「僕が大人になるまでに、字の綺麗さで頭の良さを推し量るような人が多数派を占める社会ではなくなるだろう」と確信していたのですが、ほとんど同世代でありながら吉本さんほど思い切ることはできず、「漢字は書けた方が良いだろう」みたいな感覚は持ち続けていたため、このお話では頭を殴られたような衝撃を受け、「やはり天才である吉本さんは私のような凡人とは違う」と思いました。

午後の自主企画『大阪大学総合図書館の特別見学会』では、ご担当の久保山健さんが、大阪大学総合図書館内の書庫や、空調設備の入った部屋を中心にご案内してくださいました。参加者が8名限定のイベントでしたので、私が申し込んだことでどなたかご参加できない方がいたとしたら申し訳ないという思いでしたが、久保山さんによると、お申込みされたのはジャスト8名とのこと。世の中、うまく回っているものですね（？）（もっとも、「自分が申し込んだら他の方が参加できないかも・・・」という思いで申し込みをご遠慮された方もいたようですが・・・）。この見学会では、書庫内の資料にカビが発生しないように（あるいは、マイクロフィルムの劣化が進まないように）するという資料保存の観点からのご案内をしていただき、閲覧スペースの紹介などが中心となりがちな（それがダメということではもちろんないのですが）通常の図書館案内とは一風変わったユニークな切り口からのご案内で、とても興味深い内容でした。前述の通り、普段は入れない空調設備の入った部屋にも入れていただきました。久保山さんからは「図書館員も施設設備や空調の構造といったあたりについて、最低限の知識は持つべき」といったご趣旨のご発言がありましたが、これはとても大切な視点で、これまでの自身の不勉強を恥ずかしく思うとともに、今後、機会を見つけて勉強していかないといけないことリストに、新たな一項目を付け加えることとなりました。見学会の終了後、一緒に参加した、初対面の方々とも一緒にお茶をしまして交流が生まれ、新たな友人を作るきっかけともなりました。この見学会をご担当してくださいました久保山さんに、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

（いまの・そうすけ／東京学芸大学）

変わるもの、変わらないもの

前田　郁子

ダイトケン全国大会､久しぶりの対面開催。ウェブサイトによると3年ぶりです。

私は2日目の分科会を中心に参加しました。午前中は第3分科会、午後は第5分科会。どちらの会も20名を超える参加者でした。

第3分科会は翻訳者の宮入さんをお迎えして「学術コミュニケーション入門：知っているようで知らない128の疑問」を読む会。宮入さんがこの本の翻訳や出版にまつわる話をして下さり、そのあと分科会担当のお二人が丁寧にまとめて下さった概要をガイドに、読み解いて行きました。オープンアクセスやオープンサイエンスを含め、様々な視点からの話題がありました。たくさんの試み、トライ＆エラー、裏で何が働いているか、見方を変えればどうなのか。著者のリック・アンダーソン氏からのメッセージ動画もあり、全体を通じて、学術コミュニケーションに関わるものは広い視座をもち、様々なプレイヤーの立場を見ながら、信念をもって行動するべきであるという明確なメッセージが立ち上がっていました。

第5分科会は、市民科学（Citizen Science）を図書館に応用する、がテーマ。コロナ禍における国公立大学図書館のサービス状況を毎週調査し、SaveMLAKに即時反映・公開していた小陳さんと有志の皆さんの試みと、ししょまろはんの「没年調査ソン」の紹介がありました。Citizen Science は、オープンアクセス運動の初期にもよく言及されていましたが、オンライン活動をベースにした集合知の形成は今やすっかり手段として定着しています。そして適切な担い手が、本人たちの手によって直接、適切な更新速度・頻度で情報発信できることの重要性を感じました。

どちらの分科会にも共通していたのは、「オープン化の支援」「メタデータを整えて公開、自由な利用に供する」という、図書館が昔から行ってきた本質的なことであったと思います。それが様々なバリエーションをもって私たちの前に立ち現れており、取り組むべきことはまだまだある。そしてそれは「既存の仕組みや方法を維持する」という姿勢では追い付かない部分もあり、良い、やるべき、やってみようと思った有志がまず行動すればいいのです。そんな励ましをいただいた会でした。

対面のよいところは、そういったメッセージをかなり直球で、話されている場の雰囲気を含めて受け取ることができる点だろうと思います。熱量というか。そして会場の参加者とすぐにやりとりができる。こういった大会に参加する意義のひとつは、普段の業務におけるひとつひとつの作業から、少し広い視座に自分を置くことができ、そこでの議論や情報に触れて「また頑張ろう」と思える点です。対面参加は日常行動と切り離された体験にもなり、一層自分自身へのインパクトが強くなると感じました。

同時に本大会は一部ハイブリッドで開催されたプログラムもあり、ありがたく遠方から初日参加をさせていただきました。実行委員の皆様には、事前の様々な準備から当日の運営まで、本当に頭が下がります。お世話になりありがとうございました。

思い返せば昨年はオンラインの分科会にて、大学図書館のアクティブ・ラーニング・スペースを改めて考える、というテーマの話題提供をさせていただきました。2020年の緊急事態宣言下では、多くの図書館が休館を決め、職員もなるべくリモートや分散出勤という対応をしており、「リアルな場」としての図書館はその存在自体を問われることとなりましたが、大会の時点ではコロナもだいぶ落ち着いてきて、「どのタイミングでコロナ

以前の状態に戻すか」という雰囲気になっていた部分もあったかと思います。「これからラーニング・コモンズをつくるのだ」と話されていた大学もありました。

キャンパスは今年度からすっかり賑わいを取り戻し、図書館もほぼコロナ以前と同じようになって、喉元過ぎればなんとやら、コロナの時のてんてこ舞いを忘れかけていますが、それでも、コロナ以前と比べて全く同じではありません。良い面に目を向けると、結果的にコロナの経験を通して、私たちはコミュニケーションや経験共有の機会、手段をさらに豊かにすることができたのかもしれません。それに伴う様々な現場の課題はたくさんあるでしょうが、やるべきことは意外と変わっていないのでしょう。

自分たちの現場でそれぞれの課題に向き合いながら、楽しみもたくさん作って、そしてまた来年の大会でお会いできますように。

（まえだ・いくこ／
大阪大学全学教育推進機構）

第54回全国大会に参加して

花﨑佳代子

今年の全国大会は、私にとって久々に、大学図書館に関わる皆さんに直接お会いする貴重な機会になりました。コロナ禍以前は、業務の研修や業務外の勉強会で大学図書館関係の皆さんと直接お話させていただく機会が時々あったのが、この数年はそんな機会が皆無だったため、今回お久しぶりに皆さんにお会いできたことが何より嬉しかったです。ご無沙汰していた方と近況をお話したり、日頃オンラインではやりとりがあった方でも改めて直接お会いしたり、初めてお会いする方と情報交換したりでき、とても楽しい時間でした。

オンラインと対面のハイブリッド形式でご準備が大変な中、運営に携わってくださった実行委員や講師の皆様に心より感謝申し上げます。

私は全国大会の全日程のうち、9月24日（土）の第2分科会（キャリア形成）「大学図書館員と研究活動―社会人大学院生の学びとキャリア―」・第5分科会（利用者支援）「所属機関を超えた利用者支援 ～図書館に「市民科学」を応用した事例について～」に参加しました。研修や勉強会の会場へ向かう道中は、職場ともプライベートとも違った新鮮な気持ちになります。独特の緊張感を久々に感じながら会場に向かいました。

第2分科会では、大学院進学のご経験をお持ちの3名の講師の方からのご発表がありました。会場の参加者の方が自らの大学院での経験を共有してくださる場面もあり、以下のような点をたくさんの方から具体的にうかがえたため、数年前から漠然と大学院進学について考えていた自分にとってはとてもありがたい企画でした。

・大学院進学の動機や背景

・進学先の選択肢（具体的な大学や研究科、分野）
・研究テーマ
・受験前の準備（下調べや研究計画の作成、指導教員へのコンタクト）
・進学後の生活（タイムスケジュールや受講した授業、研究の進め方、モチベーションの保ち方）

多岐にわたるお話をうかがえた中で最も印象的だったのは、自分がこれからの人生で何を行いたいのかを考え、その手段として大学院に行くことが最適か検討することが重要ということです。本分科会で、それぞれの方がご自身のキャリアにどう向き合って来られたかをうかがい、自分も今後長期的な視点で、行いたいこと・目指すものとその手段を整理していこうと思いました。

第5分科会では、市民科学を導入した取り組みを実践された2名の講師の方から事例報告があり、そのあと市民科学を導入した図書館の企画を考えるグループ討議を行いました。なお、分科会には遅刻をしてしまい一部のお話をうかがえませんでしたこと、深くお詫び申し上げます。

ご報告いただいたいずれの事例も、活動による成果（国公立大学図書館のCOVID-19対応状況のデータ収集、電子化資料の著作権者の没年調査）が素晴らしいのはもちろんですが、企画者と参加者の方が共に充実感を感じている様子が伝わってきたことが印象的でした。

本分科会では、事例報告とグループ討議を通して、市民科学を取り入れた活動の企画では自ずと、一般の方や参加者の目線（活動の成果が一般の方のニーズや価値観を満たすものかどうか、参加者が活動自体に充実感を感じられるかどうか）で考えることになるのだなと発見しました。同時に、業務内外のどちらで活動を行うにしても、企画側も活動に対して価値や充実感を強く感じていることが活動継続を支えるのだろうなとも思いました。

日頃は情報収集や勉強をするにも自分の担当業務を中心とした範囲となってしまいますが、今回のいずれの分科会も、それを少し離れて視野を広げ、考える機会となりました。今回対面形式で分科会に参加でき、講師の方から直接お話をうかがったり参加者同士でお話したりできたことはとてもよい刺激になりました。大図研ならではの、リラックスしながらも活発な情報交換ができる空気を久々に感じられてよかったです。ありがとうございました。

（はなざき・かよこ／神戸大学附属図書館）

大学図書館研究会第54回全国大会に参加して

諏訪　有香

9月22日（土）23日（日）、大阪大学豊中キャンパスで行われた大学図書館研究会第54回全国大会に参加しました。とはいえ、諸般の事情で3日目は参加できず、とても残念でした。

実は全国大会に対面で参加するのは初めてで、いつになく緊張していました。いや、大会参加以前に「飛行機のチケットが紙じゃないけど大丈夫かな？」「大阪大学で迷子になるんじゃ？」などと不安に駆られていました（如何せん、コロナによりしばらく県外に行っていなかったもので・・・）。また、普段は徒歩5分のスーパーに行くときでさえ車を使うほど歩かないものだから、駅から会場に着くころには産後の鮭みたいにヘロヘロでした。

が、実行委員の皆様はじめ、多くの方々に本当にあたたかく迎えていただき、楽しい学びと出会いの時間を過ごすことができました。心から感謝申し上げます。

そんな私の参加報告です。

1日目の研究発表。司会者の華やかさに若干呑まれながら聞いたのは、「京都大学新OPACにおける電子リソースへの誘導機能実装報告」長坂和茂氏（京都大学法学部図書室）、若狭あや氏（京都大学附属図書館）と「ディプロマ・ポリシーと大学図書館」坂本里栄氏（西南学院大学図書館）。両者とも私などが思いもつかない内容で、興味深く拝聴しました。

記念講演は「大学における教育DXと大学図書館の役割」村上正行氏（大阪大学 全学教育推進機構 教育学習支援部 教授）。DXやLSRSやSAMRモデルなど耳慣れない単語が現れましたが、逐次解説が入り、丁寧にすすめてくださったので、何とか置いてきぼりにならずにすみました。

その後の懇親会では前半で実行委員や各グループの挨拶がありました。広島地域グループの紹介が上手くできず、自分のアドリブの弱さを再確認。来年は広島地域グループの魅力をアピールできるよう精進します。後半の懇談は参加者の方々と名刺を交換し、久しぶりに対面する昂ぶりや初対面のドキドキ、リアルの醍醐味を味わいました。

翌日の分科会では、午前中は第2分科会「キャリア形成」、午後は第5分科会「利用者支援」に参加しました。

前者は「大学図書館員と研究活動：社会人大学院生の学びとキャリア」がメインテーマということで、大学院進学経験のある講師3名が失敗談も含めておおいに語ってくれました。

ちなみに講師のひとり、佐藤正惠氏（千葉県済生会習志野病院 図書室）は7月の医学情報サービス研究大会でもお世話になっており、久しぶりの再会に内心欣喜雀躍。最近周囲に大学院進学者が増えており、そろそろ考えた方がいいのかなあ、と悩んでいたので、本当に参考になりました。

午後は「所属機関を超えた利用者支援　図書館に「市民科学」を応用した事例について」。

前半は、小陳左和子氏（大阪大学附属図書館）による「全国国公立大学開館状況調査」いわゆるsaveMLAKの取り組みです。コロナ禍における全国の国公立大学図書館の開館状況の調査という眩暈がするような緻密な作業をこなしており、驚きました。時々県立図書館から開館状況の調査が回ってきていたけど、対象の広さのレベルが違います。

後半は、北邑希世子氏（京都府立図書館）「没年調査ソン」。「ソン」て何？と思いながら聞いていたのですが、「没年調査ソン」とは没年がわからない著作者の没年を皆で調査・特定し、著作権保護期間を明らかにしようという取り組み。「ソン」はマラソンの「ソン」

だとか。図書館司書が周囲を巻き込み、情報検索のスキルを使って楽しく活動している様は、とても愉快で、キャラクターの「ししょー」と「まろー」の愛らしさも相まり、心惹かれました。そのあとのグループワークもかなり活発で、面白いアイデアがたくさん生まれていました。

気が付くと夕方になっていたという、本当に濃密な1日でした。搭乗手続きの時間が迫っており、あわてて帰途に就きましたが、参加者の皆様にろくにご挨拶ができなかったことが心残りです。

今回は飲食を伴う懇親会がなく、大会名物という「地酒の会」に参加することは叶わなかったのですが、画面越しでお会いした方、初めてお目にかかる方と直接お話できて、大変楽しい時間を過ごすことができました。直接会って情報交換をする。コロナ前は当たり前に行われていたことが、こんなにも得難いものだったとは。

大会に参加された皆様、お疲れ様でした。実行委員長をはじめ、実行委員の皆様、開催にご尽力いただき、誠にありがとうございました。実は今回広島地域グループの全国委員となりました。本当なら当日準備から携わらなければならなかったのに、交通事情をご配慮いただきました。感謝しかありません。次回より運営に関わることになるのかと思うと、今から心配ですが、皆様のお役に立てるよう努めますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

（すわ・ゆか／
高知学園大学高知学園短期大学）

リアルに集えるありがたみを感じた全国大会

柿原　友紀

今年の全国大会は、私が九州地域グループの全国委員となって初めての対面開催でした。久し振りにお会いする方や、初めてお会いする方もいらっしゃったのですが、オンラインでは何度も顔を合わせていたことで、4年振りとは思えないスムーズな全国大会の始まりとなりました。コロナ禍の期間にオンラインであっても活動を続け、顔を合わせる機会があったことで、人と人とのつながりを維持できていたのだと感じました。

初日の会場であった大阪大学会館は、国の登録有形文化財である歴史的な建物の風格を残しつつ、現代風にリニューアルされた立派な講堂で、研究発表と記念講演を身の引き締まる思いで拝聴することができました。続く交流会では、飲食を伴わなかったことで、かえって恒例のグループ紹介をしっかり伺うことができ、対面だからこそ個別にお話しして旧交を深め、新しいご縁を結ぶこともできました。ご挨拶の際には、本学初のクラウドファンディングで、古文書のデジタル公開システムを立ち上げようとしていることをこっそり広報することもできました。

2日目の午前中は、出版・流通分科会で、「学術コミュニケーション入門」（アドスリー、2022.10）を翻訳された宮入暢子氏を囲んでの読書会に参加しました。電子ジャーナルの契約担当として出版社との交渉を行う中で、購読もOA出版も出版社の言い値になっている現状に疑問を持ち、学術情報流通を研究者の手に取り戻すことができないかと思っていました。しかし、宮入氏からは、研究者の手に取り戻して研究者自身が流通を担うことが本当に幸せだろうかとの発言をいただき、研究者や出版社側からの視点が足りていなかったことに気づかされました。図書館員は出版

に対して表層的な理解しかできていないとのご指摘もありましたので、これからも学術情報流通に対して関心を持ち続け、研究者や出版社の視点でも物事を考えてみた上で、図書館としてできることをしていきたいと思いました。

午後は、学術情報基盤分科会を担当しましたが、データ配布等のサポートを行った以外は、一参加者として勉強させていただきました。講師の前田朗氏に、データクレンジングの概要を伺った後、無料のデータクレンジングソフトであるOpenRefineを使用したデータクレンジングの実習を行いました。対面開催だったからこそ、お互いの画面を確認しながら参加者同士で教えあったり、操作で躓いて講師に教えていただいた内容を他の参加者に共有したりといったグループ学習を行うことができたと思います。OpenRefineの全貌を把握するまでには至りませんでしたが、目録やリポジトリなどのデータを取り込んで、クレンジングが必要な個所を洗い出すことなどに活用できる可能性を感じました。

最終日のシンポジウムでは、英語教育がご専門で生成AIの活用にも積極的に取り組まれている立命館大学の山中司先生と、ChatGPTを活用した蔵書検索の実証実験を行われているカーリルの吉本龍司氏からお話を伺いました。山中先生からは、機械翻訳や生成AIの登場によって、AIがその人の難易度に応じた問題を出すなど英語学習の手助けができるようになり、将来は英語教師ではなくAIとの学習をデザインする人が必要になるといったことや、AIの翻訳でネイティブとのコミュニケーションができるようになれば英語教育を必修にしなくてもよくなるのではないかといったお話がありました。吉本氏からは、AIに自分の書いたプログラミングを覚えさせて自分の癖を反映させたコードを書かせることや、蔵書検索での検索語をAIにサジェスチョンさせるといった使い方の紹介がありました。しかし、現状では回答までの処理時間が長いことや、「おもしろい本の紹介」といった読書相談のようなサポートは難しいといった課題もあるとのことでした。図書館のデータをオープンにすることで、利用者がAIに質問した時に図書館を案内させることができるのではないかといった提言もありました。シンポジウム終了後には、大阪大学の総合図書館と総合学術博物館も見学させていただき、最終日まで充実した全国大会となりました。

オンラインでの全国大会でも、色々と得るものはあったのですが、個別にお話ししての交流が難しかったり、Zoomから退出するとすぐに自宅の日常に戻ってしまう寂しさがあったり、余白のない全国大会だったように思います。今回の全国大会では、「現地に行って見る」、「直接会って話す」ことの大切さを改めて感じることができました。会場を提供いただいた大阪大学の皆様をはじめとして、運営にご尽力いただいた全国大会実行委員の皆様に感謝申し上げます。

（かきはら・ゆき／熊本大学）

一参加者の見た全国大会

岩井　雅史

全国大会の集合開催は4年ぶりとのことで、以前からの会員の皆さんには、やっと戻ってきたという感覚だったかもしれません。私個人としては、集合開催での参加は2017年の京都大会以来6年ぶり2回目、ここ3年はオンラインということで、集合開催の大会そのものが新鮮な感じがあって、1日目の交流会や、その後の自主的な飲み会等を通じて、多くの方とお話できたことは、とても有意義な時間でした。

ただ、今回現地参加したのは、そうした交流はもちろんですが、2日目の分科会も大きな目的でした。参加したのは午前中の第3分科会「出版･流通」で､テーマは「学術コミュニケーション入門：大学図書館員が知っておきたいこと」というものです。これは、昨年出版された本『学術コミュニケーション入門:知っているようで知らない128の疑問』のタイトルから取られたもので、同書の訳者でもある学術情報コンサルタントの宮入暢子さんを迎えて、同書の読書会を行うというのが、今回の分科会の趣旨です。参加者は20名ほどでしたでしょうか。

冒頭、宮入さんから、同書を翻訳することになった経緯や、出版に至るまでの様々な苦労、発売後の反応など、訳者の立場からのプレゼンテーションがありました。オフレコも多数交えながらのお話をうかがえたのは、開催がオフラインになったことでの、一つの効用かもしれません。

そして、今回の分科会の担当である楫幸子さんと吉田弥生さんから、それぞれ何章かずつ要約の紹介があり、それに対する宮入さんからのコメントと、参加者からの意見や質問という形で進められました。また、途中の休憩時間には、原著者であるリック・アンダーソンさんから日本の読者へのコメントが流されました。

ディスカッションの中では、メタデータのオープン化、コスト負担に関する意識など、さまざまな論点が出てきて、3時間という短い時間の中でも、いろいろな気づきがありました。これは私の個人的な事情ですが、10月の大学図書館職員短期研修で「学術コミュニケーションの動向」という講義を担当することになっており（本稿の掲載号が発行されているころには終了しているはず）、今年度の講義内容を組み立てるうえで、この本はとても参考になったので、今回の分科会はうってつけでした。

ちなみに同書については、本誌42巻3号に小村愛美さんによる書籍紹介が掲載されているので、未読の方はそちらも参考の上で、ぜひ手にとっていただきたいと思います。きっと得るところは大きいと思います。

その他、1日目の研究発表2件も、いずれも面白い内容でした。1件目は、京都大学の長坂和茂さん・若狭あやさんによる、OPACからデジタル化資料へのリンクの形成を、OAI-PMHやAPIを使って実現した事例で、これはできたら自分でもやってみたいし、応用もいろいろ考えられそうに思いました。2件目は､西南学院大学の坂本里栄さんによる、大学のディプロマ・ポリシーと図書館の活動との関係についての整理の試みで、学修支援を考える上であまり意識してこなかった点だったので、カリキュラム・ポリシーなど他の文書も含め、いろいろ考えてみるのも良いかもしれないと感じた報告でした。

1日目の記念講演は、大阪大学の村上正行先生から「大学における教育DXと大学図書館の役割」と題して、コロナ禍でのオンライン授業の普及や、ラーニングコモンズの活動の変化といった経験を踏まえて、教育DXの観点からの、各種調査の結果や取り組み内容などが紹介されました。現在授業はほぼ対面に戻ってきていると思いますが、この2～3

年の経験をDXにどう活かすかというのは、図書館にとっても大きなチャレンジだと思います。

時間の都合で2日目の午前までの参加でしたが、短いながらも充実した大会を味わうことができました。実行委員の方々ほか開催にご尽力いただいた皆様に、心から感謝申し上げます。次はできればフルで参加してみたいと思います。

今回は、研究発表・記念講演はオンラインとのハイブリッドで、分科会は現地開催のみという形式でしたが、実際に分科会に参加してみた印象では、議論をしっかりやろうとすると、ハイブリッドは難しいかもしれません。現地とオンラインとでどうしても温度差が出そうですし、オフレコの話もしにくい。なので、オンライン要素を残すなら、今回の形が良いのではという感じです。ただ、音響機器の設定など、会場によっては難しい部分もあると思いますので、開催担当の方の負担次第では、現地開催のみとして、研究発表や記念講演の動画を会員限定で後日配信するみたいな形もありかもしれません。そんな無責任な思いつきを投げて、この雑文を終えたいと思います。

（いわい・まさし／信州大学附属図書館）

学術コミュニケーションの理解とデータクレンジングの方法

松野　高徳

今回の全国大会は、第2日目（2023年9月24日）のみ参加した。学術基盤整備研究グループにて、隔週（日曜日午前9時から1時間程度）で開催される読書会に参加していて、午後に開催される第6分科会は学術基盤整備研究グループも企画、運営に参加していることから、リモートでしか顔を合わせたことがない研究グループメンバーとも直接に会える機会なので当初からこの分科会への参加を予定していた。午前の分科会は、少し前に科学技術社会論に関する論文（藤垣 裕子，藤垣 洋平「印刷文化からオープンサイエンスへの移行がもたらす課題のSTS的分析」『科学技術社会論』19巻2021）を読んで、科学史、科学社会学及び科学技術社会論からみたオープンサイエンスと学術コミュニケーションについて関心があることから、午前に開催される第3分科会に参加した。

午前の第3分科会は、出版・流通「学術コミュニケーション入門：大学図書館員が知っておきたいこと」をテーマとし、2022年邦訳の『学術コミュニケーション入門：知っているようで知らない128の疑問』の読書会を行った。学術コミュニケーションについての理解を深めることを目指して企画され、邦訳者の宮入氏の出席があった。2022年の図書館総合展では、連続セミナー「学術コミュニケーション入門」を読む（全3回）が開催され、今回の第3分科会の参加者の中には、図書館総合展のセミナーに参加された方もあったようである。

分科会は、最初に宮入氏から事前アンケートへの回答を含めてのお話があり、その後に分科会担当の楫さんと吉田さんが論点を整理され、整理された論点について宮入氏がコメントされ、途中若干の質疑があり、最後に参

加者全員が発言するという流れで進められた。宮入氏のお話の中では、ご自身の経歴（初職が大学図書館、退職して留学、留学を終えた後に外国の学術出版社に勤務）のこと、筑波大学で逸村裕先生とご一緒に学術情報流通に係る講義を非常勤講師として担当されたこと、邦訳書のカバーのデザインはソフトウェアを利用してご自身でデザインされこと、各章末に執筆された原著にないコラムのこと等に言及され、分科会に参加しないと聞くことができないものがあった。

追加情報としては、邦訳書315頁に参照情報を追記した「補訂版」をfigshareで公開していることの記載があり、公開されているデータを利用すれば邦訳書に記載されている原著注のURLの入力が省略できること、学術出版社に関連して言及された紀要編集者ネットワークに宮入氏が執筆された「《システム》としての学術コミュニケーション」（2023-07-18）が掲載されていること等があった。

午後の第6分科会は、「データクレンジングのはじめ方」をテーマとし、データクレンジングのツールとしてOpenRefineの使い方を習得できる内容で、前田氏が講師を担当された。

参加する際はネットワーク環境があるPCと修正対象の書誌データを持参することとなっていて、参加者の14名全員がPCを持参し、持参PCの種類はWindows系PCが12台とMac系PCが2台だった。PCのネットワークへの接続ではeduroamが使える参加者はこの方法で接続されていたようである。

分科会では、参加者を4つのグループに分け、前田氏が作成された資料（1.「データクレンジングのはじめ方」研修案内、2. 大学図書館員のためのメタデータクレンジングのはじめ方、3. 実習OpenRefineの使い方、参考1. 東京大学の機関リポジトリデータクレンジング実例、参考2. 大学図書館員のための正規表現のススメ）に基づき、OpenRefineをインストールするところから始まり、国立国会図書館のデジタルアーカイブのポータルからWeb APIでメタデータを取得し、取得したデータをOpenRefineへ取り込み、OpenRefineで処理を進めるための準備を行った。

実際のOpenRefineの操作では、データの読み込み、パースオプションの指定、表の表示、カラムの操作、カラムの並び替え・削除、ファセット表示、クラスタリング、文字列フィルタ、ソート、星と旗でのマーキング、外部データとの照合等の機能の使い方の実習を行い、その後は、持参データがある方は持参データでOpenRefineの操作をされていた。

ファセットやクラスタリングの機能にある各種オプションの設定では、オプションの値のなかには初めて目にする言葉があり、戸惑うところもあった。最後の質疑では、PCのスペックが低い場合のOpenRefineの動作、OpenRefineについて日本語で書かれた図書の有無、データダウンロードの自動化の方法、OpenRefineをクラウド上で動作させることの可能性等について意見交換がされた。

今回の全国大会は3年ぶりの対面での開催となった。この間、Z00Mでしかお会いしたことがない方との「はじめのご挨拶」や名刺交換、すれ違った旧知の方とは立ち話をすることもできた。分科会も、リモート開催とは異なり、一つの会場に集い同じ時間と空間を共有することでの一体感や同席した隣の初対面の方との会話等を楽しむことができた。

（まつの・たかのり／
多治見西高等学校図書館）

コロナ禍を越えて続いていく大会：大会実行委員の視点から

赤澤　久弥

「全国大会フラッシュ」号に実行委員としての原稿を寄せるのも、3大会続けてとなります。振り返ってみると、コロナ禍のただ中、日程を2日間に縮小し初のオンライン開催となった第51回大会、従来のプログラムとしながら、オンライン大会とした第52回大会と第53回大会を経た今回は、実に4年ぶりのオンサイト開催ということになりました。今号に掲載された皆さんのご寄稿には、現地へ赴いて対面でやり取りすることができたことを喜ばれる声が、そこここにあります。

さて、振り返りの号ではありますが、次の大会へ向けた準備のスタートラインは、大会開催の頃になります。かつては、大会開催期間中に次大会の運営体制や場所が発表されるのが恒例でしたが、全国大会実行委員会を都度立ち上げながら、次の開催地を探すことが通例になった近年は、なかなかそうは運びません。しかしながら、オンサイト開催を希望する会員の皆さんからの声を受けて、今大会は、当初から現地開催が前提となっていました。そうした中、大阪地域グループの皆さんが、会場確保や現地運営にご協力くださることになり、2023年1月に開催された全国委員会では、大阪での開催をお知らせすることができ、会場は、大阪大学豊中キャンパスとなりました。準備期間中からの会場に関する調整と対応、開催時における掲示物等の案内や受付のサポートなど、大阪地域グループの皆さんの尽力は大きなものでした。

一方、遠方でも参加できるというオンライン開催のメリットも踏まえ、ハイブリッド方式で実施することも、当初からの方針でした。しかしながら、ハイブリッドで開催することは、オンライン・オンサイト双方の課題に対応する必要があります。オンライン方式における運営ノウハウは、実行委員会で蓄積してきていましたが、ハイブリッド大会はあらたなチャレンジとなりました。そこで、予算や設備の制限がある中、実行委員会内の配信担当者による事前テストなどを重ねて、大会初日のプログラムをトライアルとして配信したものです。なお、従来は大会期間中に開催していた会員総会を、別日程でオンライン開催したことも、コロナ禍を経ての新たな試みとなりました。また、今大会のポスターは、初の試みとしてデザインを会員から募集しました。ポスターの中に阪大の近所の万博記念講演に立つ「太陽の塔」が隠れていることに、お気づきになったでしょうか。第54回大会ウェブサイト（https://www.daitoken.com/research/annual_conference/2023/）に掲載されていますので、探してみてください。その他にも、協賛企業様への特典の一つとして「オンラインレビュー」を用意するなど、新たな取り組みを行っています。

実行委員会は、前大会に引き続いて委員長をお引き受けくださった山口さんはじめ、大阪地域グループを中心とする現地メンバーや、全国委員会への参加依頼に応じてくださった各グループからのメンバーで構成されました。メンバーは全国に散らばっているため、４月中旬のキックオフミーティング後、近年の実行委員会の活動体制の継続として、ほとんどのやり取りはbacklogを活用して準備が行われました。大会を経た次回申し送りをするための10月下旬のオンラインミーティングをもって、今期の実行委員会の活動はひと段落したところです。このように、多くの方に関わっていただいて実行委員会の活動を積み重ねていくことは、大会運営を引き継いでいくためにも重要です。そして、全国大会は、運営に関わっていただく会員はもとより、発表したり、参加したりする皆さんがいることで成り立っていることを感じます。そのおかげで、コロナ禍でも途絶えることなく、あ

らたな取り組みを実現しながら、今回の大会も無事に開催されました。

大会期間中の大半は事務局部屋にいたのですが、大会3日目のシンポジウムでは司会を担当することになりました。そこでは、生成AIが当たり前になる近未来において、課題に対処しながらも、学術を巡る世界でヒトが新たな役割を担っていく展望が示されました。そこに参加されていた方から寄せられた、「こうした新しい潮流について否定的にならず、前向きであるところが、以前のダイトケンとは変わってきていると感じた」というコメントがあります。AIの汎用化など大学を巡る状況は変化し続けていますし、またコロナ禍のような困難な状況が出現することもあるかもしれません。そうしたときに、傍観したり単に活動を縮小したりすることは、たやすいことかもしれません。しかし、全国大会という場や大図研が必要とされる限りは、あらたな活動のあり方も含めて、広く皆さんで作りあげ、次に伝えていくことができればと、あらためて感じた大会でした。

（あかざわ・ひさや／京都大学附属図書館）

組織通信

大学図書館研究会員のご入会、ご退会、グループ移動等をお知らせする、「組織通信」を復活掲載します。

長らく、会員動静の情報をご提供できませんでしたことをお詫び申し上げます。

今後、四半期毎（10月号、1月号、4月号、7月号）に組織通信を掲載します。

なお、ご本人の許諾を得た場合のみ掲載します。

（大学図書館研究会事務局組織担当）

2023/6/1-2023/9/30分
（敬称略）

○入会

北海道地域グループ
　粟谷　禎子
無所属
　伊串　美香
　岡田　智佳子
　平澤　友貴

○退会

北海道地域グループ
　清水　夫美子
東京地域グループ
　本田　尚子
　黒澤　公人
東海地域グループ
　酒井　澄枝
広島地域グループ
　津村　光洋

以上、現勢335名

議事要録

大学図書館研究会の会務を担当している、全国委員会及び常任委員会の議事要録を復活掲載します。

大学図書館研究会ウェブページでは掲載しておりましたが、会報への掲載ができていませんでしたことをお詫び申し上げます。

なお、会報の記載は、開催日時・場所・出席者のみとし、議事の詳細については、引き続き大学図書館研究会ウェブページをご参照願います。

2022/2023年度 第10回常任委員会

日時：2023年7月30日（日）　10:00-11:10
場所：Zoom
出席者（敬称略）：
呑海，赤澤，上村，有馬，北川，和知（以上，常任委員），
澤木（以上，常任（特定）委員），
市村（以上，運営サポート会員）

2023/2024年度 第1回全国委員会

日時：2023年9月16日（土）　10:45-10:55
場所：Zoom
出席者（敬称略）：小林[北海道地域], 加藤[千葉地域], 下山[東京地域], 中川[東海地域], 山上[京都地域], 吉田[大阪地域], 德田[兵庫地域], 諏訪[広島地域], 柿原[九州地域], 楫[学術基盤整備研究]（以上，全国委員），
呑海，赤澤，上村，有馬，北川，小山，和知（以上，常任委員），
青山，磯本，澤木，中筋，渡邊（以上，常任（特定）委員）

2023/2024年度 第1回常任委員会

日時：2023年10月14日（土）14:00-16:50
場所：Zoom
出席者（敬称略）：
呑海，赤澤，上村，有馬，北川，小山（以上，常任委員）

◆議事の詳細は以下からご覧ください。
https://www.daitoken.com/committee/

事務局組織担当より

新規会員募集中!

日頃より組織運営にご理解、ご協力を頂きましてありがとうございます。

会員の皆さまの周りに大図研にご興味をお持ちの方はいらっしゃいませんでしょうか。もしくは知見を拡げたい、図書館関係者とのつながりを増やしたい、学べるイベントに参加したいといった意欲をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ大図研にお誘いください。

入会に関してご不明の点がありましたら、お気軽に組織担当までご連絡ください。一人でも多くの方のご連絡を心よりお待ちしております。

事務局組織担当: soshiki@daitoken.com

大学図書館研究会　入会案内・入会申込ページ
https://www.daitoken.com/admission_guide/index.html

会員情報（会報の送付先住所、メールアドレス、所属など）について変更があった場合も、組織担当までご連絡ください。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

『大学図書館研究会誌』第48号（2023）近日公開

『大学図書館研究会誌』は、第48号から、オープンアクセスとなります。

〈第48号 目次（12月公開予定）〉

オンラインビブリオバトル実践と課題-金沢学院大学図書館の事例-
中川恵理子

シンポジウム報告「司書養成の現状と課題: 図書館を取り巻く社会の変化をふまえて」
第53回大学図書館研究会全国大会シンポジウム「「司書」養成の現在地」報告
日向　良和

（報告）第53回大学図書館研究会全国大会第2分科会「医学・医療系図書館における利用者支援」
-実施前および事後アンケート結果まとめ-
下山　朋幸

「アクティブラーニングスペースの現状とこれからを考える」: 大学図書館研究会
第53回全国大会第7分科会「図書館建築・デザイン」より話題提供（報告）
土出　郁子

「大図研出版物オープンアクセス」
https://www.daitoken.com/publication/OA.html

（会誌編集委員会）

大学の図書館　第42巻第10号（No.599）　2023年10月25日（毎月25日発行）　ISSN：0286-6854
編集・発行：大学図書館研究会　年間予約購読料：送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部（出版物購入・問い合わせ窓口）
〒305-0033　茨城県つくば市東新井10-1-111　マザータンク気付
E-mail：shuppan@daitoken.com
＜出版物購入代金等振込先＞　三菱UFJ銀行 越谷駅前支店　普通口座：1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局
〒105-0013　東京都港区浜松町2-2-15　浜松町ダイヤビル2F
E-mail：dtk_office@daitoken.com
＜会費振込先＞　ゆうちょ銀行　振替口座：00190-2-79769　大学図書館研究会

大学図書館研究会出版部業務外部委託のお知らせ

大学図書館研究会出版部の業務を，2023年11月01日付で「マザータンク」社に委託することになりました。

会報『大学の図書館』の発送，購読料ご請求及びこれらに係るお問合せは，下記新連絡先にお願い申し上げます。

ご不明な点がございましたら，出版部までメールにてお問合せをお願いいたします。

なお，事務局の住所等の変更はございません。

	現住所	新住所
郵便番号	195-8585	305-0033
住所	東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付	茨城県つくば市東新井10-1-111 マザータンク気付
電話番号	[電話なし]	廃止します
Fax番号	(044)989-2250	廃止します
メールアドレス	shuppan@daitoken.com	[変更ありません]